

玉隠英瓊は今度の鶴谷八幡宮神事にあたり、進んで列席を望んだ。里見義豊という人物と直接会って言葉を交わしたい、そんな思惑を抱いていた。そして、驚愕すらしていた。老練と思っていたのに、このような若者だったとは……。神事が終わると、義豊は殷勤に玉隠英瓊の面前に進み出

「適いますれば、暫し教えを乞い願いたく」と、その袖に縋りついた。

「こら、太郎。御坊は多忙の御身なるぞ」

里見義通は叱責した。

玉隠英瓊は笑いながら

「左馬頭（義豊）殿の申し出、是非ともお受け致し候」

と応じた。

「しかし、建長寺の法要に何かあつては、里見家として申し訳が立ち申さず」

「なんの、上総介（義通）殿に異存がなくなれば、こちらからお願い致したく」

「異存などござりませぬが」

「安房国は法華宗の聖地ゆえ、我ら臨済の輩は易々と足を運べるものでもなく、むしろ有難いことです。こういう仕儀に相成つたのも、御仏の導きでござりましょう」

その夜、玉隠英瓊の宿坊は那古寺に設けられ、義豊とじっくり論議に及んだのである。

鎌倉の高僧が留まるとあつては、里見家当主が饗応に立たぬ訳にはいかない。義通は正木通綱に云い含め、築田政助を湊に見送せた。

そして、小声で

「築田殿の舟は金谷に停泊する予定であると、左衛門佐（里見実堯）には申し伝えてある。あとから駆けつける予定ではあつたが、これでは仕方がない。金谷へは大膳、そなたが行つてくれ」

「しかし」

「委細は左衛門佐と申し定めてある。そなたはあとで、仔細を知らせてくれればいい」

「御舎弟殿には、このことを？」

「隠すことでもあるまい、有り体に申すがよい」

予定されていた古河公方側との密謀であつたが、玉隠英瓊ともあれば、築田政助も不服は申せまい。

金谷城は安房と上総の境にあり、鋸山系の西丘陵部に存在する。金谷湊に上陸した築田政助は、迎えに出た里見左衛門佐実堯の案内で、湊近くの漁師小屋へ草鞋を脱いだ。

「さぞやお疲れあそばしたことでしよう」

里見実堯の言葉に、終始機嫌のよい築田政助は

「よい神事であつた。公方様にもよき報告ができよう」

「それは、上々」

「それにしても、上総介殿は遅れるとのことか？」

「はい」

「我々としても、ぜひ頼らねばならぬ話が、ござつてのう」

築田政助の言葉に頷きながら

「里見家は足利公方家の臣下。さき、まずはゆるりとなさりませ。些少ながら酒をご用意しております」

何かと気の利く実堯に気を許し、築田政助は雑談に花を咲かせた。

古河公方家代々の家老である築田家は、成氏以来、娘を嫁がせることで、まさに足利家と一身となり励んできた。築田家当主は古河公方から諱を賜り、一心同体を体現している。

そこへ、正木通綱が現れた。

「大殿は如何？」

「されば……」

玉隠英瓊が急遽留まることとなり、当主として知らぬ顔もできず、名代として罷り越した旨を通綱は告げた。

「玉隠和尚と申せば、古河公方も頭の上がらぬ御仁ゆえ、それでは仕方のないことよ。さりとて、こちらの子供の使いではない。云うべきは云わせて頂かねば、農としても公方に顔向けできぬゆえ」

築田政助は大きく咳払いをした。

「いま、公方様は御曹司と仲違いしておる。そのことは……」

「存じております」

里見実堯と正木通綱は即答した。

このことは、のちに〈永正の乱〉とされる公方家の内紛の序の口である。

「先年より公方と若殿は不和でな。原因は、小田原盗りをしたという、伊勢某とやらのことである」

「たしか、伊勢新九郎とか申す？」

「如何にも」

つまりは、こうだ。

「若殿は実力のない上杉家とは断交し、前々から伊勢某と結ぶべしと唱えておった。かくいう儂も、一理あると思うているのだが、いまは公方の世。足利家を割つても、何ら易がない」

築田政助はいま一度、大きく咳払いした。

「そこで、じゃ」

築田政助はふたりを見回しながら

「里見はこの一件に不可侵であつて頂きたい。

足利のことは当家で静めよう。くれぐれも関わりの合いにならぬよう、申し述べる所存」

これまで幾度となく古河との間を往復した里見実堯である。不穏な気配は常に感じていた。が、そこまで深刻な難解さを孕んでいたとは思ひも寄らなかつた。

「しかし、当家に斯様な大事を漏らしても？」

「里見は先代公方が苦境であつた折にも、忠勤を励んだ家である。公方はそのように、常々申しておる」

「勿体ない」

「玉隠和尚はいざというときの調停をお願いするべき逸材。いまは関東の豪族でこれに逆らえるものなどいない。いい機会ゆえ、里見家も和尚との絆を深めるがよろしい」

あとほとりとめない話を交わして、座はお開きとなつた。築田一行は金谷城に案内され、客間に通され一夜を過ごした。正木通綱は夜のうちに稲村城へと赴いた。

里見義通は就寝していたが、正木通綱が帰着

したことを知ると飛び起きて、大広間へと急いだ。

「苦勞であつた。築田殿の申すことは足利家内紛のことであつたか？」

「御意。まずは干渉あるまじく申し付くつもりです」

「大儀であつた」

足利家の内紛は、こののち意外な形で里見家にも降りかかることとなる。が、いまは先に為すことがあるのだ。玉隠英瑠を無事に鎌倉へ送るまでは、一寸たりとも気の抜けない義通であつた。

十十十

鶴谷八幡宮（4）

夢酔 藤山